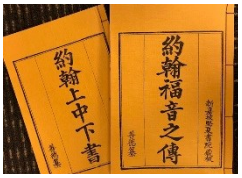
みき



新しい日本語訳聖書

日本聖書協会新翻訳事業
翻訳者・編集委員
東京外国語大学特任研究員
上智大学非常勤講師
高橋（たかはし） 洋成（よな）

――これをあなたがたの子らに語り伝えよ。子らはその子らに、その子らは後の世代に。（ヨエ一・三）

この世代の日本語訳として

二〇一八年十二月、実に三十年ぶりとなる新しい日本語訳聖書、『聖書協会共同訳』が公刊される。約九年にわたった翻訳事業の成果を心待ちにする一方、すでに慣れ親しんだ日本語訳があるのになぜ……という声もあるだろう。

日本語訳聖書の歴史をごく大雑把に振り返ってみると、一八八七年に明治元訳が出て以来、一九一七年に大正改訳（新約のみ）、一九五五年に口語訳、一九八七年に新共同訳が出た。そして、このたびの聖書協会共同訳が二〇一八年であるから、戦争の時期を例外として、およそ三十年ごとに新たな日本語訳が出ていることが分かる。世代の「世」の漢字は「十」を三つ重ねた字形だというが、聖書の日本語訳が三十年ごとに出ているという事実は、まさしく世代の移り変わりを反映しているものと言えよう。では、世代が変わると、聖書翻訳の何が変わるのだろうか。

原文の理解の変化

聖書の原文は古代のヘブライ語（一部アラム語）とギリシア語で書かれ、膨大な写本によって受け継がれてきた。そのため、今では忘れ去られた単語や表現など、意味が不明瞭になってしまった部分が少なくない。そうしたものを取り戻していくのが考古学や聖書学であり、三十年あれば研究の蓄積は大きなものになる。

身近な例を挙げると、従来の日本語訳で「強い酒」と訳されていたものは、実は「麦の酒」つまりビールであった。また、従来は「いなご」と訳されていたものも、実は「ばった」の成長段階を示す単語の一つであったことが分かっている。そこで、聖書協会共同訳では「強い酒」と「いなご」が消え、代わりに「麦の酒」と「ばった」が採用された。洗礼者ヨハネは、葡萄酒も「麦の酒」も飲まず（ルカ一・一五）、「ばった」と野蜜を食べていたのだ（マタ三・四、マコ一・六）。

日本語の変化

三十年という月日は、日本語を変化させるのにも十分な時間だ。たとえば、香辛料の「薄荷、いのんど、茴香」（マタ二三・二三、ルカ一一・四二）は、近年の日本では「ミント、イノンド、クミン」として普及しているため、聖書協会共同訳は後者を採用している。なお、先ほどの「葡萄酒と麦の酒」も、翻訳事業の中では「ワインとビール」にしようという提案があったが、時期尚早として見送られてしまった。

逆に、伝統的な日本語に合わせたものもある。教会で定着している表現に、ヘブライ語を直訳した「とこしえからとこしえまで」があるが、そもそも「とこしえ」とは「いつまでも続くこと」であるから、「とこしえから」は日本語の慣用にそぐわない。そこで聖書協会共同訳は「主をたたえよ、いにしえからとこしえまで」（詩四一・一四）とした。

誰のための翻訳か

「翻訳者は裏切り者」という格言があるように、原文を完全に移し替え、万人が理解できるような翻訳というのは存在しない。直訳であれ意訳であれ、翻訳において大事なことは、「誰のための、何のための翻訳か」を明確にすることである。

聖書協会共同訳は礼拝での聖書朗読を目的とし、「教会のための聖書翻訳」であることを、翻訳事業の当初から定めていた。原文理解の変化や日本語の変化に対応するのも、すべては「礼拝で朗読するにふさわしい日本語訳」を目指してのことである。

そして、多様な日本語訳が存在する理由もここにある。「誰のための翻訳か」を考えるとき、そこには社会の多様性を見つめる視線がある。社会の多様性こそ、豊かな翻訳文化、豊かな聖書解釈を育んでいく原動力になるのだ。

それゆえ、従来の日本語訳聖書を捨てる必要はまったくない。事実、日本聖書協会は今後も新共同訳の販売を継続する。聖書協会共同訳の意義、それは、これまで日本社会が育んできた豊かな翻訳文化の中に、「この世代の教会が使う日本語訳聖書」を加えたことなのである。

『聖書 聖書協会共同訳』日本聖書協会

❑掲示板

✿キリスト教本屋大賞二〇一八受賞

片柳弘史著『こころの深呼吸』（教文館）が「キリスト教本屋大賞二〇一八」～全国のキリスト教書店員が選んだいちばん読んでほしい本～に選ばれました。

利用者の声

ずっと仲良しでいたい

崔（ちえー） 友本枝（ともえ）

赤ん坊の時に洗礼を授けられた私は、二十代の時にイエスとの親しい出会いを体験した。その後はどんな大きな本屋へ行っても、イエスの愛を感じる本がほとんどないことに気づき、大好きな読書が虚しくなった。神さまのことが書いてある本ばかり読みたい！そんな本ばかりが並んでいる場所に行きたいのに、どこにもない！数十年後、聖三木図書館に出会い、本当に感激した。あった、あった。神さまありがとう！

小さいけれど温かい雰囲気。キリスト教の研究書、聖書についての学術書やエッセイ、聖人伝。読みたい本ばかりだ。学生時代はレポートに直接関係のあるものしか読む時間がもてなかった。当時の私は、生意気にも毎月複数のエッセイを連載していた。それは『在日コリアングラフィティー』（文芸書房）と『羊たちの賛歌』（教友社）という本になって蔵書に仲間入りをさせてもらっている。その頃は勉強とアルバイトもあり、時間に追われて読みたい本を我慢していたが今は読める。現在の私は、学校で聖書を教えながら原稿を書いている。人との出会いなどを通じて神さまの導きへ足を向けると書くべきことがわかる。二足のわらじの上に何事も時間のかかるタイプなので七～八年に一冊というゆっくりペースで書いている。来年はまた一冊生まれる予定。聖三木図書館は私にはなくてはならない存在。ずっと仲良しでいたい。

『在日コリアン
グラフィティー』
『羊たちの賛歌』
崔 友本枝著

＊＊＊＊＊＊＊＊ 今 聖三木で読まれている本・新しい本 ＊＊＊＊＊＊＊＊

喜びに喜べ：現代世界における聖性　教皇フランシスコ著
証言者たち：厳律シトー会アトラス修道院の七人の殉教者　ベルナルド・オリベラ著
迷える社会と迷える私：精神科医が考える平和、人権、キリスト教　香山リカ著
納得して死ぬという人間の務めについて　曽野綾子著
美しき教会と祈り：世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を巡る　松田典子著
種まく人　若松英輔著
こころのよるごはん：眠れぬ夜の詩篇　宮 葉子著
光のもとで：函館・トラピスチヌ修道院　北海道新聞函館支社報道部編
〝ふがいない自分〟と生きる　渡辺和子著
原民喜：死と愛と孤独の肖像　梯久美子著
大司教に死来る（須賀敦子の本棚）　ウィラ・キャザー著
ベラスケスのキリスト　ミゲール・デ・ウナムーノ著
暴力の世界で柔和に生きる　Ｓ．ハワーワスほか著
修養する生活：霊的同伴への招き　スーザン・Ｓ・フィリップス著
酒井しょうこと辿る聖母マリアに出会う旅：フランス３人の聖女を訪ねて　酒井しょうこ著
そのとき風がふいた：ド・ロ神父となかまたちの冒険　ニューロック木綿子漫画
封印された殉教 上・下　佐々木宏人著
み言葉とともに：生きる 学ぶ 喜ぶ　李 聖一著
テンプル騎士団　佐藤賢一著
科学者はなぜ神を信じるのか　三田一郎著
死を想う：われらも終には仏なり　石牟礼道子著
今ここに＝Hic et Nunc：「十五歳の巡礼」を歩き終えたら　後藤文雄著

お知らせ

✿冬期休館

十二月二十三日(日)～一月五日(土)まで休館いたします。休館中の返却は入り口右手の返却口にお願いいたします

✿冬期長期貸出

十二月一日（土）より長期貸出を始めます。

✿館報「みき」は聖三木図書館内でご自由にお持ちいただけます。また、当館ホームページでは「みき」とご好評をいただいておりました「ゆるし」各号をご覧いただけます。郵送ご希望の方はその旨お申し付け下さい。

友の会からのお願い

✿聖三木図書館友の会発行の聖三木図書館利用カード（有効期間は一年）の更新手続きと会費の納入はカウンターで受け付けております。

年会費　一般　二〇〇〇円
　　学生　一〇〇〇円
　　賛助会員　五〇〇〇円・一〇〇〇〇円

✿年会費をお振込みで納入される場合
みずほ銀行四谷支店　普通預金
口座番号　115848
口座名義　イエズスカイセイミキトショカントモノカイ
（＊お名前の前に会員番号をお書き下さい。）

✿新規入会の手続きは随時カウンターで受付けます。住所確認のため、免許証・保険証をご提示ください。

聖三木図書館報『みき』第６号
イエズス会聖三木図書館
〒102-0083　東京都千代田区麹町6-5-1
岐部ホール２F　TEL: 03-3262-0364
HP: http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/